

私立大学図書館協会海外集合研修報告書

2004年1月6日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 村山 重治 様

古庄 敬文	西南学院大学図書館
濱田 一枝	桜美林大学図書館
八田 京子	日本大学商学部図書館
伊藤 朋子	明治大学図書館
中島 晴子	同志社大学総合情報センター
坂下 景子	法政大学図書館
高井 響	立命館大学総合情報センター
高杉 幸史	中央大学図書館

標記研修を実施しましたので、以下のとおりご報告いたします。

1. 研修日程

日程：2003年10月26日（日）～11月1日（土） 5泊7日

宿泊先：San Francisco Hilton & Towers

訪問先：UC Berkeley, Research Libraries Group, Stanford University, UC California
Digital Library

2. 研修概要

2003年度国際図書館協力シンポジウムテーマ「大学図書館における学術情報流通基盤の整備と充実」に基づき、アメリカ・カリフォルニア州の先駆的活動をしている図書館・機関を見学し、研修する。

3. スケジュール

10/27(月) UC Berkeley 10:00 ～ 12:00

10:00 - 11:00 Meeting & Discussion in Doe Library Room 245 and Tour of the Doe/Moffit Libraries

11:00 - 12:00 Tour of the Law Library at Boalt Hall

10/28(火) Research Libraries Group 9:30 ～ 14:30

9:30 - 10:00 Welcome & refreshments

10:00 - Noon RLG overview: mission, membership, programs & services
Including RLG's resource sharing program (SHARES)
program objectives peer-to-peer tool: ILL Manage

Noon - 13:00 Catered lunch and informal discussion

13:00 - 14:30 RLG's online resources

digital library program: RLG Cultural Materials

archival resources program: RLG Archival Resources
student access to library resources: RedLightGreen

10/29(水) Stanford University 13:00 ~ 17:45

- 13:00-14:00 Discuss user services in a global networked environment,
various online services, and document delivery services
- 14:00-15:00 Discuss digital library services, digitization of resources, and
E-journals
- 15:00-16:00 Discuss resource sharing, digital resources, consortium, and library
cooperation in a networked globalized environment at East Asia
Library
- 16:15-17:00 LOCKSS
- 17:00-17:45 Tour of the Robert Crown Law Library

10/30(木) UC California Digital Library 9:00 ~ 15:15

- 9:15 - 10:00 Welcome & Overview with a Light Breakfast
- 10:00-10:45 eScholarship Repository, eScholarship Editions, UCIAS
- 11:00-11:45 eResource Lifecycle Management, Image Demonstrator Project
- 11:45-12:15 Lunch Question and Answer Discussion
- 12:15-13:00 Requests VDX Project
- 13:00-14:00 Web Capture Projects
Shared Licensed Collections
Resource Liaisons
- 14:00-14:45 OAC Contextual Information
Tools for Contributing Memembers
Use of METS
TEI Texts
- 14:45-15:15 Questions/Answers

4. 準備から出発まで

10月3日の初顔合わせまでに参加者から出された質問事項に加え、参考文献を読んだり、訪問校のホームページを見て、その後に考えた質問を取りまとめた。質問事項は①電子資料、②利用指導、③図書館政策等に分類し、訪問校に事前に質問を送った。今回は関東、関西、九州と参加者が離れていたため、連絡は主にメールを利用した。また、関東からの参加者で一度集まり、訪問先での質問担当者、質問事項の英訳担当者、その他経費のこと、連絡手段、録音機材、服装、手土産のことなどの事前打ち合わせを行なった。

出発までにほとんどのスケジュールは確定していたが、一部未確定の部分があったため、到着後メールで訪問先に連絡を取ることにした。

5. 研修1日目 10月27日(月) **University of California Berkeley** (以下「UCB」)

(1) Doe / Moffitt Library

UCBには、Doe / Moffitt Library、Bancroft Libraryと、20を超える主題専門図書館があり、それぞれが密接につながっている。Doe / Moffitt Libraryは、全ての専門図書館を結び付ける機能を果たしている。人文科学・社会科学分野の蔵書を構築し、学部学生を中心にサービスを行っている。

日本の多くの大学図書館と同じく、UCB Libraryでも財政は逼迫しており、資料の電子化によってその問題を克服している。UCBでは、利用者も電子媒体の資料を好んで利用

する傾向があり、図書館の政策と利用者のニーズがうまく一致している。

UCBで購読しているe-journalのタイトル数はカウントされていないが、e-bookのタイトル数は、903タイトルで、うち96%にあたる867タイトルに、10871回、利用者からアクセスされている。e-bookは電子的に1人の利用者に貸し出す仕組みになっているので、他の利用者が貸し出し中のために、191タイトル、1918回はアクセスできなかった、という統計も出ている。

資料の電子化が進むと、図書館来館利用者が減少することが懸念されるが、UCBでは前提として、オンライン利用者が増えていることを肯定的に捉えている。そして、オンライン利用者が確実に増加すると同時に、図書館に来館する利用者も増加している実態がある。サーキュレーションは減っているが、個人学習や、グループで学習の「場」として、図書館を活用する学生が増えている。図書館カウンターで貸し出ししているワイヤレスカードとソフトウェアをインストールし、個人のlaptopでキャンパスネットワークに接続できる無線LANサービスも提供しており、電子機能と図書館とを結び付けている。

また、図書館は、データベースの使い方等を教育する「場」としての機能も果たしている。データベースの使い方や資料の探し方について、対象者別、分野別に各種のガイダンス(Workshop)を各図書館内でのみ実施している。クラス単位でWorkshopを開くだけでなく、個別申込制で、レファレンススタッフと学部学生との1対1で60分間、資料の探し方について方策を教えるサービスも行っている。

レファレンスは20~30人の体制で調査・回答を行っている。UCBではe-mailレファレンスも幅広く受け付けており、e-mailレファレンスを中心に回答するスタッフもいる。e-mailレファレンス件数はカウントできない程の数にのぼり、レファレンスにおいても電子化が進んでいると言える。しかし、学生の電子資料の検索スキルは十分ではなく、Google等の検索エンジン以外の、信頼性の高い情報源の探し方について教育する必要がある。

(2) Law Library

専門図書館の一つであるLaw Libraryは、Boalt School of Lawに併設されており、法律関係の資料を中心に所蔵している。Law Libraryの蔵書検索ができる「LAWCAT」、ならびに、Lexis-NexisとWestlawを使える環境を整えている。学生はLexis-Nexisで関連する新聞を読む等、データベースの利用が浸透している。データベースを使うためにはIDとPasswordが必要で、Law Libraryでは、専用のID・Passwordを取得するために、Library Feeを徴収している。

データベースの利用方法については、Law Library内の教室でWorkshopが開かれており、講師はベンダー、もしくはライブラリアンが担当している。

Law Libraryでは、学生にデータベースの利用が普及している一方で、紙媒体の資料やマイクロフィッシュ・マイクロフィルムの利用が減っている実態が問題視されている。

なお、Law LibraryのホームページにはExamという項目があり、それをクリックすると、主題毎、教員別、学期の3項目からこれまでに行なわれた試験問題を検索でき、またその中身も見ることができるようになっていることから、図書館と授業が密接に結びついていることが分かる。

6. 研修2日目 10月28日(火) Research Libraries Group

RLGは1974年に創設された非営利団体で、16カ国160機関が会員となっている。大学図書館が約半数、公文書館・博物館が各2割強、そのほか国会図書館や歴史協会など、参加機関の多様さがRLGの広範囲な活動を特色づけている。現在、日本の会員は慶応義塾大学1校のみだが、英国では複数機関がコンソーシアムを組んでの参加という形を取っ

ている。

学術的研究の支援が RLG の活動の中心である。その最重要プログラムのひとつが SHARES (SHARED RESOURCES)である。90 機関が参加する International SHARES Partnership では、小規模な図書館への無料貸出、図書館相互の無料貸借もおこなわれている。会員間でワーキンググループを作り、e メールでの連絡やミーティング開催などが活発に展開されている。こうした会員機関との相互協力によって、それぞれの抱える問題の解決策が提供されている。

RLG のスタッフは 90 名、その三分の一を占める技術系スタッフが、リソース・シェアリングを円滑にするための様々な開発を手がけている。ILL manager と呼ばれるプログラムは、異なるインターフェイス間の直接接続を可能にした。Ariel (インターネットを利用した文献複写ソフトウェア) は、資料のスキャニングからデリバリーまでを一貫しておこなう。同様の文献提供サービスにドイツの SUBITO なども挙げられるが、日本では著作権の問題もあり難しいところである。

また、文化的資料保存の分野にも力を入れている。100 以上の参加美術館・博物館の所蔵する絵画・写真・手稿などをデジタル化し、RLG Cultural Materials というデータベースとして提供している。全巻デジタル化されたという「カンタベリー物語」の古写本やスコットランド女王メアリの最後の手紙など、多彩な例を紹介していただくことができた。このデータベースの面白いところは、その資料の特殊性から検索が What (type of works)、Where (places where works were created)、Who (all people/groups) で検索できるところである。

RLG は多言語開発の面でも知られる。データベースとして最大級の規模を誇る OCLC (Online Computer Library Center)でも対応できない資料を、RLG がサポートすることも少なくない。CJK (Chinese, Japanese, Korean)言語資料に関しては、過去 20 年で 3000 万タイトルの蓄積がある。このほか、アラビア・ヘブライ・キリル系言語の資料をも数多く有する。

誰が多言語の目録作成に当たるのか質問したが、予想していた通りアウトソーシングに頼ることが多いという。後日訪問した Stanford University の East Asia Library でも同じ質問をした。人件費節減の意味からも留学生に委託することが多いが、後で図書館員がデータを洗い直さねばならない、という答えが返ってきた。図書館員が必ずしも特殊言語に精通しているとは限らない。ネイティブ・スピーカーに目録作成を委託しても、そのままではデータとしての基準を満たすものとはなりえない。彼らが目録規則に明るいとは、必ずしも期待できないからである。図書館業務のアウトソーシングは進む方向にあるが、データの品質管理面で課題が残るのはいずれも同じである。

最新のプロジェクトとしては、2002 年 3 月に開始された RedLightGreen (前身: RLG Union Catalog) が挙げられる。Google のような手軽なサーチエンジンとして、学部生を対象に作られた。「版にはこだわらないが、この作品が読みたい」という日常的な要求に応えるため、図書館用語ではなく、より平易な主題 (title clusters と呼ばれている) をキーワードにした検索が可能となっている。

7. 研修第 3 日目 10 月 29 日(水) Stanford University

午後 1 時に Lobby of the Bing Wing of Cecil Green にて Ms. Kathryn Kerns 出迎えを受け、その後図書館見学を行なった。事前に撮影許可を求めたが、プライバシーの問題から公の撮影は許可されなかった。その後、Ms. Kerns から利用者指導に関することを中心に説明を受けた。まず、ホームページの紹介があり、初心者に対しての database の利用方法について説明があった。Stanford では、SKIL というサイトがあり、図書館で必要な

知識を得ることができるようになってきている。これは、クイズ形式で内容を深めていき次のステップへと進むようになってきている。これは6段階になっており、それが終わると Course Work に進むようになってきている。データベースについては、**I**のマークがついているものはその利用方法がついているとの説明があった。また、レファレンスで分からないことがあれば、E-Mail で尋ねることができるようになっており、それ以外の苦情、コメント、図書購入については、SUL/AIR Forms で送信できるようになっている。

ILL については申込みも多いが、実際 60%は所蔵しているとのことであった。ILL についてのデリバリー方法について質問したが、フォトコピーであれば、添付メールで届けられるとのことであった。また、料金は no charge になっていた。なお、RLCP (Research Library Cooperative Program) により、Berkeley, Austin, Stanford 間では相互協力関係を結んでおり、ダイレクトの申込みもデリバリーもできるようになっていた。

次に Mr. Paul Zarins からは、訪問前に予め送っていた質問に対しての回答があった。

- (1) 電子ジャーナルについて値上がり激しいが、図書館予算は増えていない。そのため冊子体の購読を中止しなければならない。このような問題をどのように解決しているか。

予算は解決できない問題である。Publisher との交渉はしている。Resource sharing、E-journal などはコンソーシアムするなどの工夫をしている。例えば、Yale, Harvard, Princeton etc などは North East Research Library であるが特別に加わって、コンソーシアムを形成している。

- (2) どれぐらいの e-books と e-journals を持っているか。

E-journal の冊数は具体的には挙げられなかった。

- (3) e-book をどこから購入しているか。

業者はそれぞれの専門によって異なり、特定の業者から購入しているわけではない。Net Library との場合もあるし、そうでない場合もある。

- (4) e-journal はデータベースの内容がいろいろと変わり、以前に含まれていた雑誌が今は含まれていないというようなことが起こるが、どのような対応をしているか。

常に一番新しいものに書きかえられている。その管理は TDNET に委託し、メンテナンスもしてもらっている。

- (5) 電子資料の利用は増えていると思うか。また、そのことは図書館にとって好ましい傾向だと思うか。

電子資料の利用は増えていると思う。フルテキストを PC で見ている人もいるが、全体として目的は色々で多様化したプリントを出すことにはお金が必要だし、E-journal のコピーもあるが、カード利用ができるようになったので以前より利用は増えた。また、利用者はこの傾向については好ましい傾向であると思っているだろう。

- (6) Ask Librarian (図書館への質問) の利用状況はどれぐらいか。

一週間に約 50 件。

- (7) Search Engine はどのようなものを利用しているか。

Google, Yahoo などの検索エンジンを良く使っている。

- (8) 遠隔地からの大学図書館サーバーへのアクセスはどのようにしているか。

遠隔サーバーはプロキシサーバーを使っており、ID とパスワードで管理している。

- (9) 新しいインフォメーションをどのように伝えているか。

ホームページ、ワークショップ、チラシ等を利用している。

- (10) 選書はどのような人が行なっているか。また、冊子体から e-resources 等に媒体を変えることには抵抗があると思うが、どのように対処しているか。

選書についてはそれぞれのスペシャリストがいて、その人たちがしている。

e-resources は年をとった人で苦手な人もいるようだが、図書館がイニシアチブをとって冊子体から e-resources に変えることについては半ば強引に進めている。

次に East Asia Library を見学し、その後、Ms. Kotake から East Asia Library における ILL の現状について話を聞いた。

現在 GIF(Global ILL Framework)に参加していないため、海外への複写・貸借依頼は少ないが、参加すれば利用者がもっと増えるのではないかということだった。今のところ、早稲田大学から ILL で必要なものは借りているとのことであった。また、日本のコレクションについて、例えば、新聞はそれぞれ収集担当の図書館を決めてリソースシェアリングを図っているとのことであった。

朝日新聞----Stanford

日本経済新聞----UC Berkeley

産経新聞-----UC San Diego

読売新聞-----Santa Barbara

NCC (全米日本図書資料調整委員会) からは 1992 年より無料の貸出し援助が出ているそうである。また、日本から文献複写を申し込む場合、国立大学図書館協議会 (ANUL) には無料で提供しているとのことであった。

コレクションについては、中国書は Yearbook などを所蔵している。台湾の歴史関係については 4000 タイトル、新聞は 1948 年よりフルテキスト縮刷版で所蔵している。また、Electronic resources については、UC San Diego や Santa Barbara 校などとコンソーシアムを組んで、Chinese Digital Collection を作っている。また、「Superstar」というデータベースの中には、7,000 タイトルの Chinese Journals が含まれている。Chinese CD については、Traditional materials として、1984 年以降の Newspaper を購入している。

日本のコレクションについて、レファレンスは 1 対 1 で予約を取ってもらう形で行っている。使っているデータベースは Nichigai Web, Nacsis IR を使っているがすべて日本語で表示される。修士は少なく博士クラスなので日本語のわかる人が殆どで、小竹さんが側で教える形をとっている。日経テレコンなど本当は契約を希望しているが、その契約が難しく、もし裁判があると日本まで行くことになり、契約違反があれば即停止になってしまう、という厳しい状況下にあるため契約できないでいるそうである。

新聞見出しは 1945~95 年の CD-ROM は購入してあるが、英語版で対応しないため購入中止となった。XP は対応しているが Stanford では奨励していない。読売については購入したが、ハードディスクに入れることが、許可されていない。しかし、あまり CD-ROM の購入希望はしていないということである。LAN にのせて利用させるなどということは人手不足のため現在はしていないそうである。

16:15-17:15 Ms. Victoria Reich 担当

“LOCKSS” について

LOCKSS については、非常に専門的な技術のことだったので、話を聞いているだけではなかなか理解することが困難であった。これについては、Ms. Victoria Reich の論文があるが、話の内容はその論文に沿ったものであった。LOCKSS とは Lots of Copies Keep Stuff Safe の頭文字をとったもので、「多くのコピーが資料を安全に保つ」という意味である。簡単に言うと、一つの文献をいくつかの図書館が保存することで、万が一の事故があってもどこかがその資料を保存し続けることができるように、オンラインコンテンツも Web 上にキャッシュという形でいくつかのレポジトリに分散してそれらのコンテンツが消えないように保存させるといったものである。それを達成するためのソフトウェアが

LOCKSS である。これは無料で、しかも安価なハードウェア上で稼動するものである。Web 上の情報はいつの間にか消え去ってどこに行ったか分からないということが起きるが、これらを防ぐために非常に有効な手段である。(この報告については、久保順子さんの「コンテンツ流通基盤技術論」(Ms. Victoria Reich の論文の翻訳)を参考にした。)

17:15-17:45 Law Library 見学

Mr. J.Paul Lomio に館内案内をしてもらった。

データベースは Lexis-Nexis と Westlaw 両方が入っており、それぞれ専用のプリンター、専用の紙が備付けてあった。そのため、学生はこれらのデータベースの打ち出しは無制限に打ち出せるようになっていた。これらはすべてベンダーが提供しているとのことであった。また、Lexis-Nexis は分からないことがある場合は、ホットラインが用意しており、いつでも尋ねることができるようになっていた。

閲覧席の一部には Reserved seat があり、指定の用紙に記入したものが席にはりつけてあり、座席の確保が許されている。入退館システムは大変シンプルであり、カードを読み取りの機械に近づけるだけで、ゲートが反応する仕組みになっている。わざわざカードそのものを取り出す必要はなく、手が塞がっていても入館可能である。この図書館ではやはりデータベースを利用しての勉強が主流となっており、Lomio 氏はいい資料が揃っているが、現実にはあまり利用されていないと言われていた。

8. 研修第4日目 UC California Digital Library

The University of California Libraries は Berkeley 校を始めとした9つのリサーチキャンパスから構成されている。The University of California Digital Libraries (以下 CDL) は UC 全体の電子サービスに関するライセンス契約を扱っており、8,000 タイトルの電子ジャーナル、250 のデータベース、7,000 の検索ツールなどを扱っている。また、9つのキャンパス共通の Online Union of Catalogue を作成し、提供している。

CDL は以下2つの目的で機能しており、第一の目的は UC 内の各キャンパス間の蔵書・資料の共有化の促進である。文献依頼を例にあげると、従来通り現物貸借も行っているが、電子形態の資料をそのままスキャン (コピー) して、デスクトップからデスクトップへ電子的に送信を行うケースも多く、電子資料の共有化を推進している。なお、送信されたデータへのアクセスについては、利用者に電子資料へのアクセス先を教え、直接利用者が指定された場所へアクセスし必要な資料をダウンロードするという方法をとっている。

第二の目的は、デジタル資料へのアクセスを発展させ、管理することであり、CDL では利用者がどのような情報源を求めているかを調査すると共に、どのように情報を統合し、どのような形態で利用者へ提供するかについて研究している。

CDL が取り組んでいるプロジェクトについていくつか紹介すると、まず eScholarships Repository という機関リポジトリのプログラムがあげられる。これは、カリフォルニア大学の価値のある研究成果を蓄積するための電子保存書庫で、出版されているものはもちろんのこと、出版前の資料や審査論文も含んでいる。このリポジトリでは、ワーキングペーパー、テクニカルレポート、注釈付きのデータセットなどの研究結果や学術成果をデジタル資料としてデポジットするための場所が提供されている。このプロジェクトには参加することも自由で、またこれらの資料を使用することも自由になっている。なお、著作権は著者が持っている。ここには 2,300 以上の論文がデポジットされ、一週間で約 8,000 以上のダウンロードが行なわれており、そのほとんどがカリフォルニア州外からのアクセスである。約 100 以上のカリフォルニア大学の機関、学部、研究ユニットが参加している。その参加状況からも学術コミュニティにおける機関リポジトリの重要性が認識でき、かつり

ポジトリが学術出版と研究活動をつなげる中核的な役割を果たしているといつてよいだろう。このプログラムを通して、リポジトリをより多くの研究者が教育・研究の両面に役立つ資源として認識するようになり、さらには、カリフォルニア大学の研究がこれまで以上に注目されるようになった。

今一つの重要なプログラムに Online Archive of California(OAC)があげられる。これは大学図書館、博物館、公文書館など 75 の機関が参加機関独自のデジタル・コレクションを持ち寄り、OAC として様々な分野を抱えたひとつのアーカイブを作成しているものである。つまり、多種多彩なデジタルコレクションへのアクセスを可能にしたユニオンカタログである。基本文書 (manuscripts,papers,pictures,etc をさす) は EAD で符号化され、Image と Text は METS によって符号化され、基本文書にリンクされている。基本文書は 7,400 件、デジタルオブジェクトは 12 万のイメージと 2 万 5 千ページのテキストがある。この OAC のおかげで、これまで直接来館しなければ、利用することができなかったコレクションをこのデータベースを活用することで、デジタルコンテンツの検索・閲覧をすることができるようになったといえるだろう。

9. 2003 年度海外集合研修を終えて

今回の派遣メンバーは図書館の各部門で現場業務に従事する担当者と構成されていたことから、先方の担当者とも実際の質問のやり取りができたと思う。

10 月 3 日の事前説明会での提示資料である各自の訪問先への質問事項を基礎に、それ以降も訪問先の組織のホームページを通して情報収集や調査を続け、メンバーの関心分野に基づいて、各機関に質問を事前に送信することとした。各機関の担当者とも、訪問時には、好意的に回答していただき、有益な意見交換ができたと思う。

アメリカの図書館や各機関の訪問を通して、各種の電子的情報サービスの展開、ドキュメントデリバリーサービス (DDS)、リモートユーザーのサービスへの対処など、感心させられる部分が大いにあった。それも図書館職員の削減や予算の伸び悩みといった危機にありながらも、図書館が果たすべき役割は何かを常に意識し、守りにまわらず、新たなサービスを打ち出し続けてきているという彼らの積極進取の発想と精神には感心させられた。そこで活躍する図書館員の柔軟な企画力と、理想を実現しようとする行動力には見習わなければならない、参考になる部分が多分にあった。ミハルコ氏の講演にあったように、資料のオンライン化は確実に進み、資料の利用方法も変化してきているが、その流れを図書館として、いかに捉えていくか Workshop 等を見ると確実に対応を行なってきていることが分かった。

アメリカの先駆的活動をしている図書館・専門機関の視察、研修は参加メンバーにとって、大変貴重な経験となった。海外集合研修を企画、アレンジしていただいた国際協力委員会の皆様に、研修参加メンバー一同、深く感謝の意を表したいと思う。

なお、研修全体を通して参加者から寄せられた意見および改善点は別途国際協力委員会宛てに文書で報告することとする。

10. 参加者の雑感について

① 西南学院大学図書館 古庄 敬文

今回の研修で、アメリカの図書館は研究・教育の中心になっていることをあらためて実感した。図書や雑誌だけでなく、オンライン資料もすべて情報を提供するの図書館の役目として定着しており、それにあたってはライブラリアンだけでなく、情報処理担当者と一緒に利用者のことを第一に考えていろいろなことが考えられていることがわかった。ミハルコ氏は講演で、「我々の仕事は、新しく作られたパラダイムの中に、質の高

い、信頼される、また、権威のある重要な情報を提供することです。」と述べている。情報提供の方法は多様化しているが、その中心となるのは資料のことをよく知っている、また情報提供の信頼度の高い図書館が中心でやるべきであるということをライブラリアンがしっかり認識していることをひしひしと感じた。ともすれば、電子化が進むと図書館の価値が下がってしまうのではないかというような悲観論もよく耳にするが、アメリカのライブラリアンのように情報を提供するの図書館の役目だということで、いろいろな可能性を探ることが大事だと感じた。

② 桜美林大学図書館 濱田 一枝

決定通知を頂いてから出発までの時間がとても早かった。質問事項の提出までに殆ど時間がなく、参考文献やHPの把握研究に十分な理解を得ないままに進んでいった感がある。そんな厳しい中であって8人が協力し合い夫々の役割を果たせたことは、大きな成果につながったと思う。

訪問した機関は、それぞれがProfessionalとしての誇りを持っていることが表情に良く表れていることを実感した。まずどこでも笑顔で迎えてくださった点は共通していた。笑顔の裏にあるのはProfessionalとしての余裕であると思う。そう感じた瞬間、日頃笑顔で仕事をしてきたかどうか自問自答していた。

資料の活用化のための工夫、専門家を育てるための環境、評価、どの点においても土壌の違いを痛感させられたが、それが刺激となったことは明確である。Librarianの専門性とその育成について大規模な意識改革と組織の構築が必要となろう。そしていつの日か日本ならではの大学図書館の特徴作りとLibrarianの育成が行われることを願って止まない。

そして今私たちに出来ることを模索し具現化することが始めの一步となろう。今回の研修に参加させて頂きましたことを改めて深謝する次第です。

③ 日本大学商学部図書館 八田 京子

今回参加して特に感じたことは、日本も今後は電子媒体資料の増加とともに、利用者が電子資料を好むようになってくるだろうと思いました。その時に信頼性の高い情報の探し方をどうやって教えるか、情報選択能力を身につけさせることが、その利用者にとっては一生役に立つことになるのでとても重要なことだと感じました。お会いしたLibrarianの方達のように自信をもってすべての利用者を指導していけるかということ、今は自信がありませんがその時のためのスキルアップに努めなければと感じました。また図書館の見学が来たことは、各自これからの図書館環境整備に役立てることが出来ると思いました。研修先のスタッフの方々が準備をした上で真剣に対応して下さいましたことに大変感謝しています。研修内容についても他の参加者の方々に助けをいただきながら無事研修を終えることができました。二度とない貴重な経験をする事が出来たと思います。ただ個人的には勉強不足、準備不足を痛感した一週間でした。

④ 明治大学図書館 伊藤 朋子

私は今春、大学に採用された。図書館業務の経験も浅いのに、最初の研修先が海外と聞いて、面食らった。参加者全員で顔合わせをすると、案の定自分が一番新米である。通訳なしの研修も不安だが、それ以前に先輩方の話が日本語ですら分からない。

現地では、慣れない環境で毎日が目まぐるしく過ぎた。異常気象、部屋割りのトラブル、交通アクセスの面倒さが心身の疲れに拍車をかけた。そして、自分の図書館に関する知識のなさを痛感した。

現地スタッフとの雑談中、研修に参加した理由を訊かれた。冗談交じりに“**My boss forced me**”（上司に強いられて）と答えると、“**No! Your boss RECOMMENDED you**”（「推薦されて」でしょ!）と返された。この他愛のないやりとりを、たびたび思い出す。なぜ自分が送り出されたのか、その意味をかみ締める。

この経験を通じて、自分はずいぶん肝が据わった気がする。分からないことがあれば、調べればいい。だめなら、訊けばいい。その姿勢を保って日々積み重ねることを目標としたい。

⑤ 同志社大学総合情報センター 中島 晴子

アメリカの先駆的な活動をしている大学や研究機関を訪問して感じたことは、技術的にはそんなに相違はないということでした。

オンラインレファレンスや各種ワークショップ、オンラインジャーナル、デジタルアーカイヴ等、既に実施しているものも多く、特に日本の図書館で実現不可能なものはありませんでした。

にも関わらず、大きな違いを感じたのは、その実行力です。各機関が組織的な目的を明確に持ち、その実現に向けて邁進しているところに顕著な差を感じました。

アメリカは、大学図書館であっても多くの寄付金があるなど財政基盤の違いもありますが、日本の大学図書館においても利用者サービスを第一に考え、国際的に遜色ないサービスを提供していかなければならないと痛感しました。

⑥ 法政大学図書館 坂下 景子

研修を通して、各訪問先では「利用者教育」と「レファレンス」に重点が置かれており、サービス対象に応じたサポートを目指している点を顕著に感じました。例えば、UCBの「**Term Paper Clinic**」やStanford U.の「**SKIL(Stanford's Key to Information Literacy)**」と呼ばれるプログラムは、学部学生を対象にした利用者教育において新たな方向性を示すものであると思います。また、機関内・外を問わず資料共有（**Resource Sharing**）を推進することで、限られた予算内で豊富な資料とサービスを利用者に提供しようと取り組んでおり、特に電子ジャーナルのコンソーシアム契約については、自館が**Print**版を所蔵していないタイトルも**Online**版で利用できるため大変有益であると思いました。

インターネットの普及に伴い、図書館に来館しなくても必要な情報を入手することができるようになったが、一方で「勉強するための場所」、「グループワークに取り組む場所」や趣味の本を読みながらくつろぐ場所という図書館の新しい意義を求めて来館する利用者も増えつつあるとの報告がありました。今後は、サービス対象に応じたサポートを目指し、図書館側から積極的に情報とサービスの提供を行うことにより、利用者に求められる場所として機能していけるよう尽力したいと思います。

最後になりましたが、今回は海外集合研修に参加させていただき誠にありがとうございました。

⑦ 立命館大学総合情報センター 高井 響

アメリカの大学では、学生のパソコン利用度が非常に高く、電子資料を当然のように使っている状況を目の当たりにし、日本の学生との違いを感じた。資料の検索から閲覧までオンラインで行うことが浸透しているため、情報収集で分からないことがあれば、自ずとオンラインレファレンスやe-mailレファレンスの利用につながる図式ができあがっていた。電子化の面で、利用者の要求と図書館のサービスは高水準で合致している

と感じた。

また、電子化が進むにつれて、紙の資料の利用が減ることが問題視されていると考えていたが、必ずしもそうではないことが興味深かった。「紙の資料の利用が減っているとはいえ、電子資料の利用は確実に増えており、すなわち、全体としての利用は増えている」と非常に肯定的に捉えられていた。そのような考え方は図書館の貸出冊数だけでなく、レファレンス受付件数においても同じで、オンラインレファレンスのアクセス数は増えているので、レファレンスの利用は増えているという観点で捉えられており、利用形態の変化について意識の違いを感じた。電子化を同じレベルまで進めるためには、まず図書館職員の認識を変える必要があるのではないかと考えさせられた。

⑧ 中央大学図書館 高杉 幸史

わずか5日間の現地滞在だけで、これこそが米国の図書館の最新実態であるとの理解が得られたとは到底思っておりません。しかしこれまで文献で読んだり、話して聞いてきただけの理解に終始していたことを今回自分自身が各大学図書館や専門機関の訪問を通し、現場の図書館員と血のかよった対話をかわして、実際に自分の目で見、肌で感じ取る機会が得られたことは何よりも非常に有意義なことでした。米国の図書館も予算の伸び悩みや人員削減といった逆境にありながらも、現場の図書館員が確固たるビジョンを持って、新たなる知見や技術を積極的に導入し、進歩をとげようという努力の姿勢を目の当たりにし、大いに触発される部分がありました。米国で彼らが直面している課題や問題点は日本にも共通し応用できる部分が多々あり、今後、図書館で業務を遂行していくうえで、役立つことと思っています。

今回どの訪問先の図書館・専門機関においても、図書館員やスタッフの方々から懇切丁寧で好意的な対応をしていただきました。これも海外集合研修について周到な企画や手配を国際協力委員会の皆様にとっていただいたからこそです。この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思います。

以 上